体験の風をおこそう

多様で変化の激しい現代社会に求められる

「社会を生き抜く力」

子供の頃の体験から育まれる

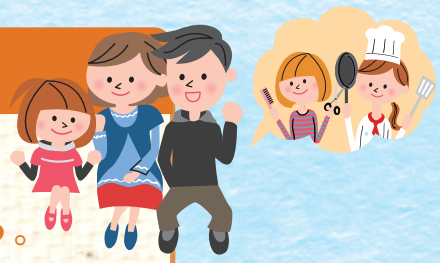
National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

子供の頃からの体験が大切

20～50 代を対象に、年齢期別の
「子供の頃の体験」と現在の「社会を生き抜く資質・能力」との関係性を調査分析[※1] し、
子供の頃の体験について **3** つのポイント結果が得られました。

※1「子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究」(国立青少年教育振興機構 , 平成 30 年 3 月)

人間関係



子供が活躍できる場や機会を創り出し、将来の夢や人生を語る。

先生や友達、近所の人など周りの人から褒められる経験が多かった人、また、その経験に加え、叱られた経験が多かった人ほど、「社会を生き抜く資質・能力」の高い人が多くなる傾向がありました。更に、縦の関係の大人(親や先生)より、横や斜めの関係(友達や近所の大人)に褒められた経験が多かった人の方が、また、親子で将来の夢や人生について語った経験が多かった人の方が「社会を生き抜く資質・能力」の高い人が多くなる傾向がありました。親が、子供が活躍できる場や機会を設け、友達や近所の大人から褒められるきっかけを創ると共に、子供と将来の夢や人生について語ることの大切さが示されました。

体験の多寡

家族行事を盛り上げ、日頃のお手伝いは年齢に応じて出来ることから。

家庭での「家族行事」や「お手伝い」、地域の「友達との外遊び」、学校の「体育祭、文化祭や実行委員」、「部活動の部長や役員」の体験が多いほど、「社会を生き抜く資質・能力」が高い傾向がありました。また、活動を行う為には「意欲」が大切で、これを育むには就学前から「基本的生活習慣」をしっかりと身につけさせることも大切であることがわかりました。

体験の質

子供と向き合い愛情・絆を深め、子供が遊べる環境を整える。

体験の量だけではなく、質(深さ)の関係性についても示唆が得られました。「家族からの愛情を感じた」「家族で一緒にいることが楽しいと感じた」「家族の一員として役に立っていると感じた」、また「遊びに夢中で時間がすぐ過ぎてしまった」「新しい遊びを考えた」など、家族との愛情や絆を強く感じたり、遊びの熱中度が高いほど、「社会を生き抜く資質・能力」が高い人が多くなる傾向がありました。家族との愛情や絆を育むこと、遊びに熱中できる環境を整えてあげることが大切だと考えられます。

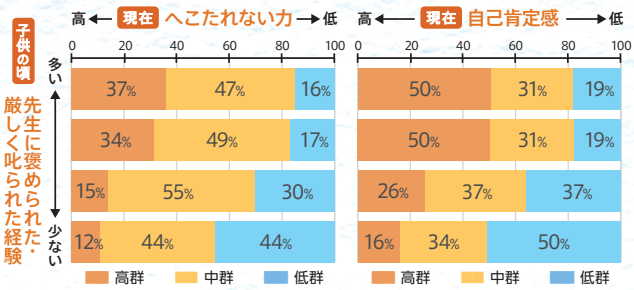


図 1. 先生に褒められた・厳しく叱られた経験と「へこたれない力」と「自己肯定感」の関係

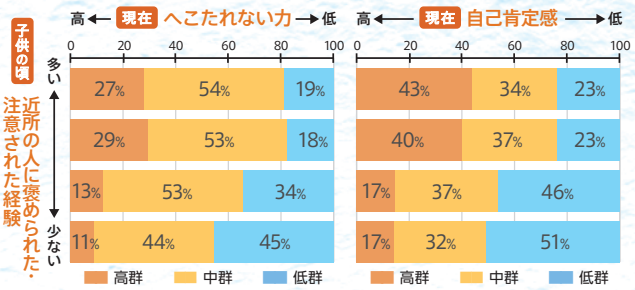


図 2. 近所の人に褒められた・注意された経験と「へこたれない力」と「自己肯定感」の関係

「子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究」(国立青少年教育振興機構 , 平成 30 年 3 月)を基に作成

変化の激しい社会に求められる力とは？

「社会を生き抜く力」[※2]は、学力テストでは測れない いわゆる非認知的能力に含まれます。現代の社会で必要なのは、自分らしく活躍できる力です。

「複雑で予測困難な社会であるからこそ、変化を前向きに受け止め、社会や人生、生活を、人間ならではの感性を働かせてより豊かなものにすることや、複雑化・多様化した現代社会の課題に対して、主体的な学びや多様な人々との協働を通じ、その課題解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと等」[※3]が求められています。

※2 中央教育審議会（答申）（平成 25 年 4 月）
※3「教育振興基本計画」（閣議決定，平成 30 年 6 月）

育みたい資質・能力

国立青少年教育振興機構ではこれまでの調査研究結果を踏まえ、「社会を生き抜く力」を「社会を生き抜く資質・能力」として、4 つの力の関係性、子供の頃の体験との関係を調査[※4]しました。

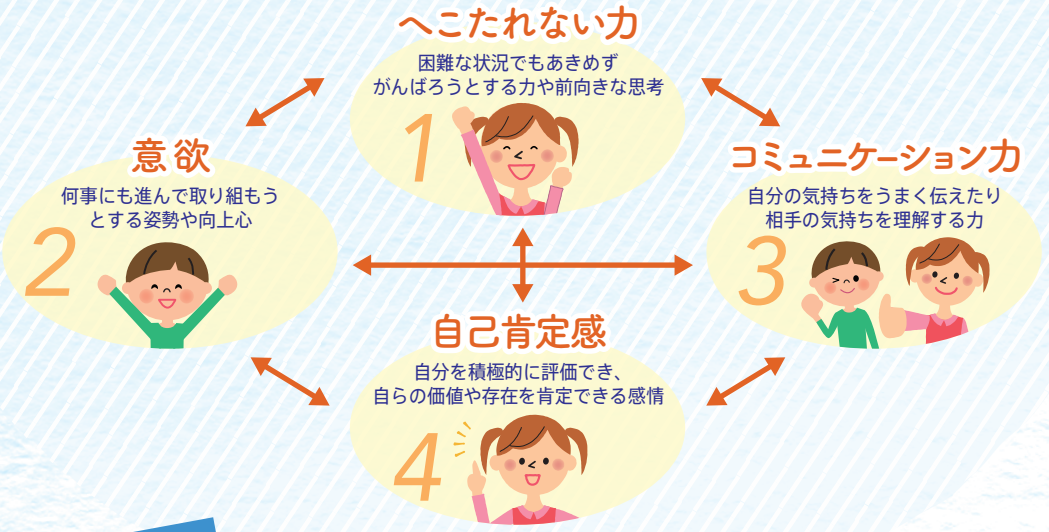


図 3. 社会を生き抜く資質・能力の関係

「子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究」（国立青少年教育振興機構，平成 30 年 3 月）を基に作成

調査の結果わかったこと

4つの力は相互に関係性があり、どれかではなく、4つをバランス良く育むことが重要。

特に「意欲」と「コミュニケーション力」、「コミュニケーション力」と「自己肯定感」、「へこたれない力」と「意欲」の間には、強い関係性が見られました。また自己肯定感については、日本の子供たちを他国と比較した場合に低い[※5]という結果も得られています。「自分らしさ」「役に立っている」「やればできる」などの自己肯定感が高ければ、学習や様々な機会への参画、コミュニケーションを積極的に行うことにつながり、他の 3 つの能力の育成に望ましい影響が与えられると考えます。そうしたことから、自己肯定感は「社会を生き抜く資質・能力」を育むための土台となる重要な要素であり、その涵養が大きな課題と考えられます。

※4「子供の頃の体験がはぐくむ力とその成果に関する調査研究」（国立青少年教育振興機構，平成 30 年 3 月）
※5「高校生の心と体の健康に関する意識調査－日本・米国・中国・韓国の比較－（国立青少年教育振興機構，平成 30 年 3 月）

インターネット社会だからこそ子供を見つめよう

子供と向き合い、会話を重ねて、親子の愛情を確かめ、より絆を深める必要性。

機構が行った親子関係に関する日米中韓の４ヶ国比較調査※6の結果からは、日本における良好な親子関係の存在を認識することができた一方、親子関係について心配な状況も明らかになりました。

子供との直接的コミュニケーションよりもスマホの情報の方が大事であると考えている保護者が一定程度存在している傾向がうかがえる結果となったからです。例えば、親子が一緒にいても、それぞれが自分の携帯電話やスマートフォンを操作していることが、「よくある」「たまにある」と回答した割合が小中学生とも約６割でした（図４）。

また、「親は携帯電話やスマートフォンを使用しながら私と話す」ことが「よくある」「たまにある」と回答した割合は小中学生とも約５割となりました。このうち、「親は携帯電話やスマートフォンを使用しながら私と話す」ことが「よくある」と回答した者ほど、親と話すのが「とても好き」、「親と一緒にいるのが好きだ」、家族と一緒にいるのが「とても楽しい」と回答した割合が低かったことが示されています（図５）。より良い親子関係構築のための一つの視点として、親子が一緒にいる場では、子供としっかり向き合い、会話を重ねながら、親子の愛情を確かめ、絆を深める必要性が示されたと考えています。

※6「インターネット社会の親子関係に関する意識調査」（国立青少年教育振興機構，平成 30 年７月）

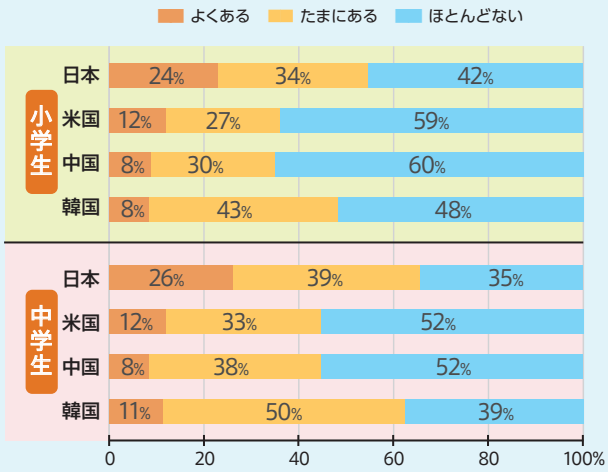


図４. 家族が一緒にいてもそれぞれが自分の携帯電話やスマートフォンを操作している

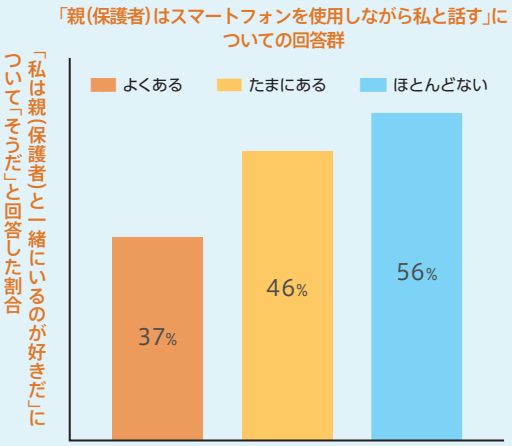
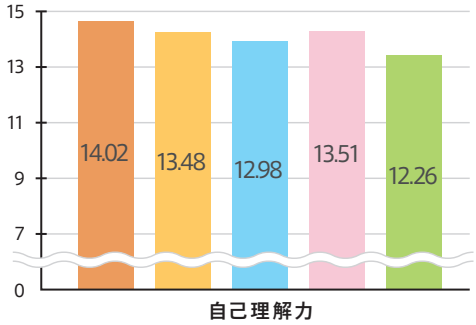


図５.「親（保護者）はスマートフォンを使用しながら私と話す」×「私は親（保護者）と一緒にいるのが好きだ」と回答した割合（日本）

「インターネット社会の親子関係に関する意識調査」（国立青少年教育振興機構，平成 30 年７月）を基に作成

幼児期から中学時代までの読書体験がポイント！

社会を生き抜く力（自己肯定感や意欲）を高める読書体験。親子の関わりで読書体験の連鎖をつくろう。



- 紙媒体中心：本（紙媒体）による読書時間が長くそれ以外のツールによる読書時間が短い。
- スマートデバイス中心：スマートフォン等による読書時間が長く、それ以外のツールによる読書時間が短い。
- パソコン中心：パソコンによる読書時間が特に長い。
- パソコン、スマートデバイス中心：パソコンとスマートデバイスによる読書時間が長い。
- 読書時間低：すべてのツールによる読書時間が短い。

図 6. 使用ツールにおける意識・非認知能力得点の違い

「子どもの読書活動の効果に関する調査研究」報告（速報版）
（国立青少年教育振興機構，平成 31 年 12 月）

機構が行った読書活動の実態と大人になった現在の意識・非認知能力※7 との関係について調査した結果、紙媒体による本を読まなくなっている人が、世代に関係なく増えていることが明らかとなりました。
また一方では、スマートデバイスが新しい読書活動の手段となっていることも事実です。読書のツールに関係なく、読書をしている人はしていない人よりも意識・非認知能力は高い傾向にありますが、紙媒体で読書をしている人の非認知能力は高い傾向がありました（図 6）。

※7 意識・非認知能力とは、IQ などでは測れない内面性（「今の自分が好きだ」などの自己肯定感や「分からないことはそのままにしないで調べる」など意欲・関心）のことをいう。

また、子供の頃（就学前から中学時代まで）に読書活動が多い高校生、中学生ほど、大人になった現在の自己肯定感（図 7）、意欲・関心などの意識・非認知能力が高いことが明らかとなりました。
さらに、就学前から中学時代までの読書活動が多い人ほど、「子どもに本の読み聞かせをした」ことがあると回答した人は８割と高く（図 8）、「子どもといっしょに図書館を利用した」ことがあると回答した人も約６割以上でした。この調査結果より、就学前から中学時代までに読書活動を多く行った人ほど、そうでない人に比べて、読書を通した子供との関わりが多いことが示されています。
就学前から中学時代までに紙媒体で本を読むことや絵本の読み聞かせを親子で行うことで、自己肯定感や意欲・関心を育むだけでなく、親から子供へ、子供から大人へ読書体験の連鎖が起こるのだと考えます。

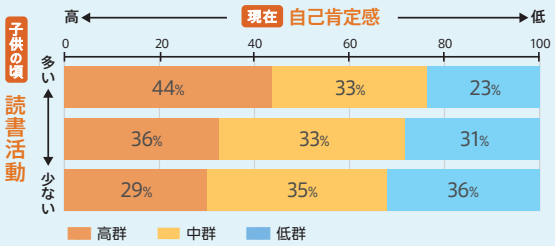


図 7. 子どもの頃（就学前から中学時代まで）の読書活動と大人になった現在の意識・非認知能力の関係

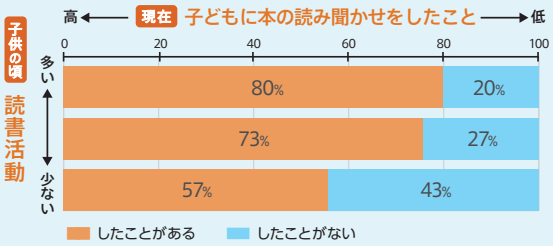


図 8. 子どもの頃（就学前から中学時代まで）の読書活動と親子での読書活動の関係

「子どもの読書活動の実態とその影響・効果に関する調査研究」（国立青少年教育振興機構，平成 25 年 2 月）

社会を生き抜く力の他にも、子どもの体験を通した研究の成果が多く示されています

「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」の結果をもとに「子どもの頃の体験は人生の基盤」のキャッチフレーズを定めました。

これまで機構が行ってきた調査の成果を「読書　手伝い　外遊び」をテーマに、「読書はコミュニケーション能力の基盤となります」「お手伝いは道徳観・正義感、自己肯定感を育みます」「外遊びはチャレンジする意欲や規範意識を育みます」等のキャッチフレーズにまとめています。

これまで機構が行ってきた調査研究成果等を踏まえ、自立した大人へと成長する過程において大切になる子供の頃の体験と、将来、社会を生き抜くために必要となる資質・能力を体系的に整理しています。

「子どもの成長を支える20の体験」に掲載されている20の体験の中から、「読書」に焦点を当て、子どもたちの成長を支える読書環境の整備について考えるものになっております。当機構の調査結果から分かったヒントの他、又吉直樹さんの経験からのヒントも掲載しています。

これらのパンフレットをご希望の方は、下記までご連絡ください。

SNSによる情報発信

最新の調査結果やイベント情報など、青少年教育研究センターの最新情報を発信しています。是非、ご覧ください。

青少年教育研究センター
Facebook ページ

https://www.facebook.com/niye.rcye/

上記の他にも、青少年の体験活動等にまつわる様々な調査研究に関する情報を発信しています。

National Institution For Youth Education
国立青少年教育振興機構

〒151-0052
東京都渋谷区代々木神園町3番1号青少年教育研究センター
https://www.niye.go.jp　TEL 03-6407-7741

令和6年3月発行